

義経 = 成吉思汗 ?

46期生

I テーマ設定の理由

ぼくは小さい時に、マンガの義経を読んだことがあり、その頃からぼくは、義経が好きになりました。そこで、義経=成吉思汗説を知りました。その2人の人物が同一人物ではないかということがどこから生まれたのか、どの点が似ているのかなどに興味を持ち、義経=成吉思汗について調べることにしました。

II 研究方法

- (1) 文献調査 図書館や新聞から義経についてくわしく調べる。次に、同じようにして成吉思汗についてもくわしく調べる。
- (2) 考察 まず、義経と成吉思汗の性格、体格などの相違点を比較する。それから、その2人の似ていない点についても考える。

III 研究内容

1 義経と成吉思汗を比較する

(1) 風貌

義経は図1を見てもらったらわかるように、美男子でした。現代でも、劇などを見ても、美男子という印象をうけます。また頼朝と義経がはじめて対面した時にも、頼朝は義経にこう語っています。

「そなたの面ざしを見てあるに
亡き父上に瓜二つぞ」

義経の父、義朝は役者にもかなわぬ立派な容貌であったといわれています。それから身体つき

は、あの有名な船を八艘もとんだという八艘飛びの伝説があるぐらいだし、今はだれもが知っているとおりに、義経はとても小柄な男でした。

では、成吉思汗はどうでしょうか？図2を見てもらうと、かなり太っていて、また、鼻の下と、口の下にひげをたくわえています。目は細く、いかにもモンゴルの覇者という感じがします。次に、体格ですが、これも成吉思汗は、大男で、しかも太っていたという話が一般的です。これでは、小柄な義経と大男の成吉思汗は、全く別の人物ということになります。しかし、今、新しい説が、成吉思汗の大男否定



▲図1 義経



▲図2 成吉思汗

説が登場しています。その説とは成吉思汗が、大男ではなく、背の低い人間だったということです。ある昔のモンゴルの書物には、こう書かれています。

「伝説に依れば、成吉思汗は威を部民に示さんとして常に身に厚く衣服を纏いて肥大を装い、長靴の底を厚くして、身長を補い、夏は遠くバルジュナの湖畔に暑を避けて出でざりきと。成吉思汗の肖像の鬚髯は甚だ不自然なればつけひげなるやの観あり。」

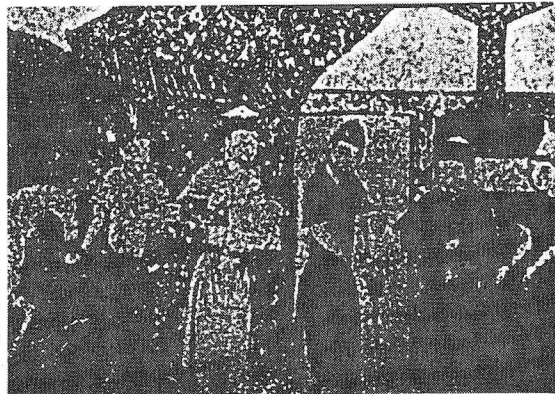
このつけひげや服をたくさん着たりするのは、ナポレオンが着衣の腹部に綿を入れて肥満を装い、シーザーがひげをつけて、威を示そうとしたのとよく似ています。また、図3を見ても成吉思汗はまわりのだれよりも背が低くみえます。この絵から考えてみると、義経と同じぐらいの身長だったとも考えられないことは、ありません。この説が真実にしろ、うそにしろ、本当に成吉思汗の背が高かったかどうかは一概には言えないようです。

(2) 戦術

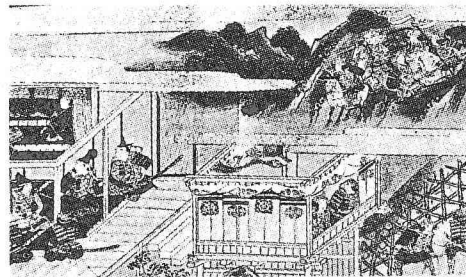
義経の有名な戦いには、宇治川の戦い、一ノ谷の戦い、屋島の戦い、そして壇ノ浦の戦いがあります。義経はとても戦争上手でした。そこで、義経の強さの秘密はどこにあるかと考えると、相手が思いもしなかった戦法でしょう。例えば、一番有名なのは、図4の鶴越です。これは、夜馬にのって険しい山を背後からおりて攻撃する奇襲戦法です。その他にも、橋のない川をむりに渡って攻撃するような、さまざまな奇襲戦法を得意としているようです。

次に成吉思汗ですが、成吉思汗がまだ家来が少なかった時の戦いというものは義経に似て、無茶でした。言い方を変えると奇襲戦法にもなりますが…。例えば何百、何千の敵を相手に30人で乗りこもうとしたりすることがありました。しかし、何万、何十万の軍を指揮するようになると、戦い方は全くちがうようになっていきました。その戦い方というのは、けっして無理をしない、つまり正攻法でした。そして、次々に領土を増やし、モンゴル、アジアの王になったのです。

たしかに、義経がモンゴルへ渡って、戦法を奇襲戦法から、正攻法へと戦い方が変わっていったとも考えられます。



▲図3 降伏した敵将と会う成吉思汗
(向って右より2人目)



▲図4 絵巻物にみる鶴越の逆落し

(3) 成吉思汗(即位前)と義経の人生

- ①父エスガイ(エゾ海)はニルン族(日本族)の中のキャト族(京都族)ボルジギン氏(源氏)であった。母ホエルン・エケは池禅尼である。
- ②義経の父義朝は平家(タタール族)に殺され、義経は池禅尼によって養育された。
- ③義経は静御前(ボルテ)を頼朝(メルキト族)に略奪され、奥州藤原氏(ケレイト族)の長である秀衡(ワンカン)の援いを乞うた。秀衡は弟分の忠衡(ジャムカ)を出陣させた。
- ④静(ボルテ)は義経と再会したが、静には子供(ジュチ)がいた。
- ⑤義経は忠衡(ジャムカ)と共に逃亡したが、やがて仲たがいで十三翼の戦いが始まった。
- ⑥この後、成吉思汗は1206年皇帝の位についた。(モンゴルの文章参照)

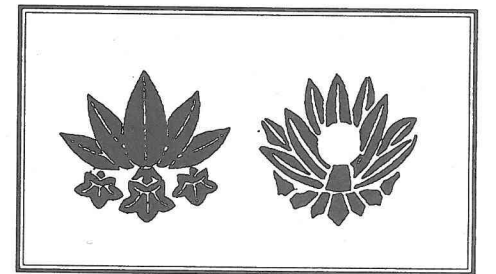
この上の①～⑥を見てみると、まるで、この時代の成吉思汗の説話は、実は義経のものを書きかえたようにも思える。ここで、①～⑤の事実を成吉思汗とワンカンがナイマン族を討伐する戦いの前につけ加えれば、成吉思汗の即位前のストーリーはすべて説明がつく、忠衡はチャンコだから、チャムカになっても語呂は合うと思います。

(4) 源家の紋とモンゴル武人の紋

これは、鹿島昇さんの体験話ですが、ある時、ラマ寺に入りました。このラマ寺では、毎日8月15日にオボー祭という成吉思汗の命日にお祭りがあります。その寺の祭りの時、柵に垂れ幕が掛けてありました。その幕の模様とは笹りんどうの紋でした。笹りんどうの紋といえば、だれもが思うのが、源家の紋章です。その模様は、その源家の紋章と全く一致していました。また、そこには顔はどう見てもモンゴル人なのに、日本の兜と陣羽織をつけた人形があったのです。そして、それと同じような話なのですが、石川さんが中国で警官と雑談していた時のことです。ある文章を見せられました。それは、

「昔、ゲンギケイという人が一党をつれてこの地にやって来て、ここで死んだ。」と記されていました。その後、石川さんは日本の兜が飾られていたという廟に行きました。そこには鹿島昇さんの話と同じように笹りんどうの紋が墓石の台石の部分の横に並んでいました。ここで出てくるゲンギケイという人物は、源義経を音読みで読んだだけではないのだろうか。もしそうだとすれば、笹りんどうの紋が、このあたりにあるのも説明がつかます。

ところで、ちょっとこのテーマと話がずれますが、成吉思汗が即位した時、九旒の白旗をかかげたという史実があります。白旗、これこそ源家の旗じるしではない



▲図5 源家とモンゴル武人の紋

でしょうか。また、九旒の九こそ、源九郎義経の九ではないでしょうか。

2 成吉思汗は渡り鳥か

これまで、義経と成吉思汗を比較して、共通点などを探してきましたが、成吉思汗が日本人ではなかったとわかれば、それで済みます。では成吉思汗は本当にモンゴル人だったのでしょうか。成吉思汗がモンゴル人じゃなかったとして、ジャムカがワン・カンに向かってこう言いました。

「おん身と私とはカモメである。だが、テムジンも渡り鳥の雁である…。」

この言葉は次のように解釈できないでしょうか。

「あなたと私とはモンゴル人であるが、テムジンは渡り鳥のようにどこか南の国から来た男だ。いつまた南の国に帰ってしまうかわからない…。」

そう解釈しないかぎり、ジャムカが自分達とテムジンを区分した理由がわかりません。成吉思汗はモンゴル人ではなかったと考えると、それまでのモンゴル人が持ってなかった戦略家としての政治家としての資質が彼にあったということもなげます。

それから、あれほどの英雄が、“無学文盲”であったのも、成吉思汗がモンゴル人でなかったことの裏づけではないでしょうか。

1204年、成吉思汗がナイマン族を討伐したとき、タタンガというウイグル文字に通じた人をとらえました。モンゴルには文字がありませんでした。そこで、「よし、これからは、ウイグル文字で、モンゴルの言葉をかかせよう。」と自分の子供達にウイグル文字を学ばせました。公用語にもウイグル文字を使わせました。しかし、成吉思汗は生涯ウイグル文字を学ぼうとせず、読み書きができませんでした。また、西征のときに、長春真人という人が来ました。成吉思汗はこの人の話を忘れないために侍臣に漢字で記録させました。これは、後で、自分が読めるようにしておいたのかもしれませんが。

このように、成吉思汗が本当にモンゴル人だったかどうかは疑わしい話が残っています。しかし、これまで、義経＝成吉思汗だということを進めてきましたが決定的な、はっきり義経＝成吉思汗と言える証拠がありません。次の章では、義経キ成吉思汗だとしてなぜ伝説が生まれたのか？について考えてみようと思います。

3 なぜ伝説が生まれたのか

ではなぜ、このような伝説が生まれたのでしょうか。ぼくは、まずこの伝説が生まれるきっかけとなったのは、義経の首についてだと思います。それは、死後43日もたって鎌倉へ送られてきたからです。43日もたてば、だれだって不思議に思うにちがいありません。いくら酒づけにされていても、43日もたてば、やはりはっきりと義経の首とわからなくなったのではないのでしょうか。このような疑問を持った人々が、この伝



▲図6 成吉思汗

説となるきっかけをつくったのだと思います。

つぎに、このきっかけから義経生存説というのが生まれたのは、「判官びいき」という政治的敗者への同情からでしょう。東国の人は頼朝嫌いでした。そして義経は、風のように現れて、平家を滅し、風のように消えていった。人々の人気物でした。だから、この2つがくみあわさって、義経を同情する気持ちがふくれあがり、大陸へと渡って成吉思汗となったのだと思います。今までも図7のように、衣川より北の東北や北海道までにも、義経伝説の残っている所はたくさんあります。



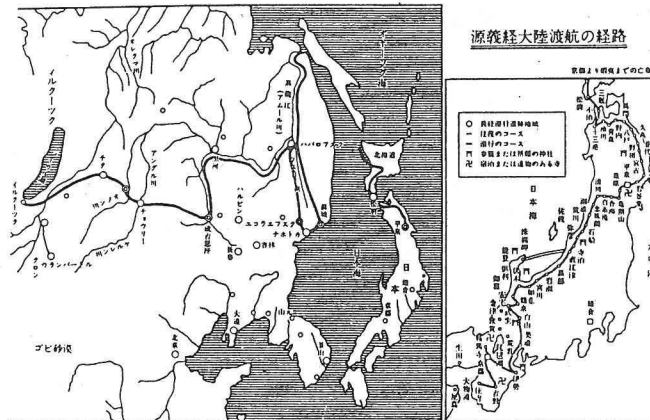
▲図7 義経伝説日本地図

また、伝説での義経の亡命コースは、北海道からカラフトへ抜けて、海を渡って、中国、ソ連あたりに渡ったということになっています。

義経の自伝がはじめて成立したのは、室町時代で、その頃の本では義経は衣川で戦死したことになります。はじめて義経が大陸へ渡ったと記されているのは、林羅山の「本朝通鑑」という本です。

また、このころは蝦夷へ対する関心が強まっていた、水戸藩も蝦夷へ探検に行っていました、そこにある時、金国の將軍は源義経の子、源義鎮ということが記された「金史別本」という本のうわさがたちました。そのため、義経＝成吉思汗伝説が、人々の間でさわがれたようです。しかし、この本はニセ物で、蝦夷や義経に関心を持っていた沢田源内という人の仕業だということが後にわかっています。

その100年後、シーボルトが、また義経＝成吉思汗説を唱え、その後にも、「成吉思汗ハ源義経也」という本で、大ベストセラーとなり、今でも学者の間では、問題になっているそうです。



▲図8 義経大陸渡航の経路(仮説)

IV 結論

源義経と成吉思汗が同一人物だったかどうかは、この研究でははっきりしませんが、やはり、源義経と成吉思汗が同一人物でないのが普通だろうと思います。

伝説が生まれるほど、この2人が一生を戦いに費し、風のように現れ、いつのまにか去っている。そして悲劇の最後をとげる。こうした人生の中で、2人は人々から大きな人気と期待を背にうけながら生きていったのだらうと思います。そうしたことがあったため、人々が義経をもっと長生きさせ、そして英雄にならせようと思ったにちがいないと思います。

ここで、ぼくは、源義経と成吉思汗は同一人物でないかとまとめておきますが、はっきりとした証拠がないかぎり、2人をめぐって学者の戦いがくりひろげられると思います。もし、未来に結着がついて、この2人が同一人物とわかったとしても、成吉思汗の子孫であるモンゴル人が誇りに思っている成吉思汗が異民族と言われれば、だまっては、いないと思います。

こうして、いつまでも歴史的事実は、何百年後にあがいても、変わらないものなのかもしれません。

V 総括

歴史って、奥が深くて面白いなあこの研究を終えて、つくづく思っています。今までは、難しい事柄を無理に頭におしこんでいたみたいだったけれど、まだまだ調べれば数学の難問を解いたような喜びと感動をあたえてくれると思います。

今回の自由研究は、あまり歩いて資料を集めるような現地調査というものはなかったので、次は、歩いて楽しめる自由研究というのもしてみようかと思っています。

VI 参考文献

- ・井上 靖 (1966)「蒼き狼」新潮文庫 373p
- ・奥富 敬之ほか (1986)「別冊歴史読本 源義経のすべて」新人物往来社 280p
- ・鹿島 昇 (1987)「義経=ジンギス汗新証拠」新國民社 320p
- ・勝藤 猛 (1981)「成吉思汗 草原の世界帝国」清水書院 206p